九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

対馬方言の性格

奥村，三雄
九州大学九州文化史研究施設

https://doi.org/10.15017/7178711

出版情報：九州文化史研究所紀要. 18, pp.83-121, 1973-03-31. Kyushu Bunkashi Kenkyusho, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

対馬方言の性格

奥村三雄

目次

一　はじめに
一―一　資料について
二　対馬島内の地域差
二―一　地域差に関する問題点
三　対馬方言の特異性
四　対馬方言の系統―筑前方言との共通性
四―一　豊前・筑前・肥前各方言との相関性
四―二　いわゆる対馬方言の非九州弁的要素について
付　「桑実」および「井戸」の方言分布図

一　はじめに

対馬の方言に関しては従来、竹敷漁史氏「対馬方言」（『風俗画報』明31年）あたり以下、滝山政太郎氏『対馬南部方言集』（昭19『全国方言集』七）等々、かなりの記述が認められるし、『人文』1号（昭26、日本人文科学会）や『対馬の自然と文化』（昭29、古今書院）などでは、八（九）学会連合調査における対馬方言の調査報告が行われている。―音韻（金田一春彦・山本謙吾・三根谷徹）、語彙（泉井久之助・堀井令以知・奥村三雄）、語法（吉町義雄）―　また新しくは、国立国語研究所編の『日本言語地図』1集～5集の如きも参考になる点が多い。

しかし、九州諸方言―更には日本語諸方言―との相関性の問題等々、対馬方言の性格については、なお研究の余地が

かなり残されている。例えば、「対馬方言は語彙的に見て、全島が比較的斉一である」（『対馬の自然と文化』105頁）「対馬は各部落間の語形の差が殆んどなく一様である」（『人文』1号67頁）、「対馬の方言は大体において、珍奇なものが少い」（同65頁）、「対馬方言は、語法的には豊前豊後に近い」（同65頁）、「語法に関する限り、豊日地方に似て九州味が稀薄」（同72頁）という様な記述がしばしば認められるが、それぞれ問題が残されるのである。『国語学』17集の拙稿にひき続き、ここで対馬方言の性格に関する若干の考察を試みようとする所以である。

一―一　資料について

本稿の資料は概ね、昭和25年夏（八学会連合、泉井久之助氏・堀井令以知氏と共同、語彙が中心）、昭和26年夏（九学会連合、方言関係は筆者のみなる為、音韻・語彙・語法の諸面にわたる）、昭37年秋（個人的調査）における臨地調査の結果を主とするが、その他、対馬出身者数名につき福岡（昭44～昭47）で調査した結果なども、参考資料として用いる。

以下、参考までに、私の調査地点名（調査当時）を表示しておこう。

上県郡

豊崎町＝鰐浦・大浦・比田勝・津和原・唐舟志・豊。

佐須奈村＝佐須奈・佐護・湊・井口。

琴村＝舟志・琴・一重・小鹿・葦見。

仁田村＝伊奈・仁田・鹿見・志多留・飼所。

峯村＝志多賀・賀佐・三根・櫛・佐賀・吉田。

下県郡

奴如岳村＝佐保・貝口・廻・卯麦・小綱・銘・唐州。

仁位村＝曽・仁位・佐志賀・嵯峨・水崎・和板・塩浜・千尋藻。

船越村＝鴨居瀬・小船越・大船越・赤島・芦ケ浦・賀谷。

鶏知町＝竹敷・鶏知・加志・今里・根曽・樽ケ浜・洲藻・昼ケ浦。

厳原町＝小浦・厳原・曲。

佐須村＝阿連・小茂田・上槻・久根浜・久根田舎・下原・樫根・日掛・椎根。

久田村＝久田・安神・内山・久和・豆酘瀬・豆酘内院。

豆酘村＝豆酘・浅藻。

この場合、地点名は概ね、昭和25・26年頃のものによったが、これは、本稿の資料の大部分が、その頃の調査に基くからである。なお、かかる方言分布相を説明する為には、或程度古い行政区分による地名の方が適当である事など言をまつまい。

各地点の位置関係については、本稿の最後に参考として掲げた「桑実」及び「井戸」の方言分布図を参照されたい。

調査方法に関しては詳述しないが、八学会連合調査（昭25年度）の場合については、『人文』1号64頁以下で或程度述べられているし、九学会連合調査（昭26年度）の場合については、『国語学』17集及び『対馬の自然と文化』427頁以下の拙稿で述べた事がある。なお、前者は、泉井・堀井両氏と共同の語彙調査班であったが、後者の場合は、私一人であった為、むしろ、音韻や形態素（ヴァンドリエスの用語、以下同様）的語形式の補い調査をあわせ行った。また、昭37年度の調査は比較的短期間であったが、アクセント調査を中心とし、その他の面の補い調査をあわせ行った。

使用した調査票は、概ね、東条操氏の『簡約方言手帳』（郷土研究社、昭6）に基きつつ、それに若干の手を加えたものである。

被調査者としては、それぞれの土地生えぬきの老人を中心としたが、位相差などを考慮して、数人に集って頂いた場合が多い。なお、対馬においては、幸いに、各地の居住者の多くが、被調査者としての資格者－つまり、他地域での生活が二年以上にわたらない－であった。

また、本稿では、対馬方言の性格を明らかにする為、対馬以外の諸方言をしばしば参照したが、それらに関しては、私の調査が不十分である為、諸氏の御報告を利用させて頂く所が多かった。中でも、東条操氏編『全国方言辞典』（昭26、東京堂）、同編『分類方言辞典』（昭29、同）、国立国語研究所編『日本言語地図』1巻～5巻（昭41～昭47）などは、特に参照する所が多かった。

二　対馬島内の地域差

先ず、対馬島内の言語差について見るに、例えば、下記(イ)～(ニ)の如き地域差がかなり認められる。それらの地域差を大きいと見るか小さいとするかは水掛論であるが、この小さな（面積からも人口からも）島の内部に、下記の様な差がいろいろ認められる－下記(イ)～(ニ)の挙例はその一端にすぎない－という事は、決して無視できないはずである。隣りの壱岐が、全島殆んど同じ方言形を用いている事などよく考え合わすべきであろう。

(イ)　下県南端の豆酘（及びその付近）は、言語的特徴が著しい。左記①～⑧はその一例であるが、この場合、その特異性には、いわゆる意義素的語形式のみならず、音韻・アクセントや形態素的語形式などの面の特徴も、相当ふくまれている点見逃せまい。

① アクセント――二拍名詞の場合、豆酘では福岡方言などと同様、いわゆる一類（庭）・二類（川）と、三類（山）とが合併しているが、島の大部分では、一類・二類と、四類（笠）・五類（雨）とが合併している。この辺の事情につき詳しくは、『人文』1号78頁・『対馬の自然と文化』91頁の金田一春彦氏記述や、平山輝男氏『九州方言音調の研究』273頁〜などを参照されたい。

② 豆酘では、アイ（蟻）・ソイ（それ）など、語中尾のリ・ル・レに該当する音節が、しばしばイ音になる。これに対し、厳原など島の中央部では、語中尾のリ・ル・レが概ね変化しないし、また、島の周辺部では、語中尾狭母音の弱化脱落傾向が著しいが、リ・ル・レがイ音に変る事は稀である。

③ 豆酘では、アンミカンナスィーテ（あのみかんは酸っぱいから）・コンニャヒェーテ（今夜は冷えるから）など、順接助詞にテを用い、島大部分のケン・ケーと対立する。なお・酸ウテ・冷エテの如き連用形接続のテは共通語その他にも存するわけであるが、豆酘のテは終止形接続である点興味深い。デの清音化形と見るべきか。

④ 豆酘における甘藷のトーイモ形は、島大部分のコーコイモ形と対立する。

⑤ 豆酘におけるとかげのトーゲ形は、他地域におけるトカゲ・トカギリなどの形と対立する－cf.『日本言語地図』224図の場合、豆酘のトーゲ形は示されていない。

⑥ 亀（小さなもの）のイシガメ形は、島大部分のコーズ・クーズ形と対立する。

⑦ 咽喉のノード形は、島大部分のノドンス形と対立する。

⑧ 飯櫃のハンボン形は、島大部分のメシツギ形と対立する。等々。

(ロ) 前記豆酘の他、周辺部諸地域では、厳原など島の東海岸中央部との言語差が著しい。左記①〜⑩は、音韻や形態素的な面におけるその一例である。

① kwa音＝周辺部には、クヮジ（火事）などのクヮ（kwa）音が存するが、厳原その他では稀。

② ʃe音＝周辺部では、シェ（瀬）・アシェ（汗）の如きシェ（ʃe）音が著しいが、厳原などでは稀。

③ ai連母音＝周辺部では、ヘー（蠅）・ヒテーグチ（額）の如き融合長音（eː）化が著しいが、厳原などではそれが稀。

④ 語中尾狭母音＝周辺部では、カム（kam・紙）・ボーッラ（boːbra・南瓜）・の如きi・uの弱化消滅傾向が著しいが、島の中央部ではそれが稀。

（注）ムの如き表記は、母音の無声化または弱化消滅を示す。以下同様。

⑤ 上二段動詞＝周辺部には、起クル・落ツル形がかなり存するが、厳原その他では大ていオキル・オチル（orオテル）形。

⑥ マ・バ行四段完了形＝周辺部ではトーダ（飛）の形が著しいが、島中央部は大ていトンダ形。

⑦ サ行四段完了形＝周辺部ではオトイタ・オテータ（落）の如き形が多いが、島中央部は概ねオトシタ形。

⑧ 敬語辞＝周辺部は見ラル（ル）形が多いが、厳原などでは見ラシャル・見ラ（orナ）ハルの如き形が多い。

⑨ 逆接助詞＝周辺部はバッテ形が多いが、島中央部は概ねケッ（orン）ド形。

⑩ 目的格助詞＝周辺部にはホンバ（本を）の如き形が存するが、島大部分は、ホンヲバ・ホンヲ（orノ）などの形が普通である。

⑪ その他、意義素的な面の語形差については後述(二)の諸例を参照の事。

(ハ) 対馬には、水崎（旧仁位村）・赤島（旧船越村）・浅藻（豆酘村）等々、比較的新しい時期に、本州－特に、山口県や広島県など－人が集団的に渡来して開いた部落も相当存するが、それらの部落において、非対馬方言的特色が著し

い事は言をまつまい。

先ず、それら諸部落のアクセント体系が概ね、広島や山口と同様の山陽式である事は、金田一春彦氏説（『人文』1号84頁）の如くである。

その他の諸現象においては、アクセントの場合ほど純粋でなく、隣接地域との言語交渉が或程度認められる様であるが、しかし、全体としてはやはり、山陽方言的特色が著しい。左記①～⑩は、浅藻方言の意義素的語形式が、隣接（豆酘村・久田村）諸部落のそれに比し、孤立しているものの一例であるが、それぞれ概ね、山陽方言的性格が著しい様である。

① キノンバン（昨夜）—cf. 多くの地域ではキノンバンが一昨夜を意味する。
② ヤブ（藪）—cf. 多くの地域ではヤボ・ヤブゾーなど。
③ コーキチ（梟）—cf. 他地域はネコドリ・シモヨビなど。
④ トンボ（蜻蛉）—cf. 他地域はエンバなど。
⑤ ギイス（飛蝗）—cf. 他地域はチョンマその他諸形を用いる。
⑥ アリ（蟻）—cf. 他地域はアリムシなど。
⑦ イモ（甘藷）—cf. 他地域はコーコイモなど。
⑧ ケチ（吝嗇者）—cf. 他地域はガンドーなど。
⑨ サシミ（刺身）—cf. 他地域はナマミ・セギリなど。
⑩ オヒツ（飯櫃）—cf. 他地域はメシツギなど。
⑪ シバク（叩く）—cf. 他地域は大ていシワク。
⑫ コンブル（潜る）—cf. 他地域は大ていカズク。—なお、中国・四国地方でコブルは、主に、「水中を歩いてわたる」事を意味する様である。

(二) 対馬方言の地域差いろいろ――対馬方言に関しては、前記(イ)～(ハ)の他にもいろんな地域差が認められる。以下、その辺の事情を示す為、やや蛇足ながら、具体例を列挙してみよう。なお、左記①～(129)の諸例は、或面で、対馬方言に関する地域差の整理という様な意味をも持つ。前記(イ)～(ハ)の諸項でとり上げた事例と重複するものもかなり存するわけである。

① 起きる＝オキル（多い） オクル（比田勝・佐護・舟志・仁田・三根・奴加岳・貝口・久根・内院） オケル（加志）

② 起きた＝オキタ（大部分） オケタ（オケル地域の他、佐須奈・佐護・伊奈・西津屋・三根・貝口）

③ 落ちる＝オチル（多い） オツル（琴・仁田・三根・小船越・貝口・曲・阿連・久根・上槻・内院・豆酘）オテル（唐舟志・佐護・琴・小船越・貝口・小浦・久和・久根・上槻・内院・瀬）

④ 落ちた＝オチタ（多い） オテタ（オテル地域の他、比田勝・佐須奈・湊・舟志・仁田・伊奈・加志・阿連）

⑤ 出した＝ダシタ（多い） ダイタ（鰐浦・豊・葦見・琴・舟志・伊奈・志多留・鹿見・貝口・唐州・小船越・久根・上槻・安神・豆酘―cf. この形は老人に多い。各地でデータの如き音変化形をとる）

⑥ 読んだ＝ヨンダ（多い） ヨーダ（仁田・奴加岳・廻・貝口・久根・上槻・安神・豆酘）

⑦ 来られる〔尊敬〕＝コラル〔ル〕（豊・佐須奈・佐護・舟志・伊奈・仁田・鹿見・加志・三根・佐賀・曲・内山・瀬・豆酘―コはケ・キ等となる地域もある） コラシャル（三根・志多賀・櫛・佐賀・豆酘） キナハル（佐賀・小綱・厳原・小茂田）

⑧ 読まなかった＝ヨマ〔ン〕ジャッタ（多い） ザッタ（佐護・佐須奈・阿連・内山・豆酘） ンヤッタ（志多留・船越・厳原）

⑨ 読むけれども＝ヨムケン〔orツ〕ドン（仁位・水崎・大船越・雞知・竹敷・小浦・厳原・阿連・久田・浅藻）バッテ（佐須奈・佐護・狩尾・伊奈・志多留・久和・久根・上槻・安神・瀬・豆酘）―cf. その他、島の多くの地域で

は、ケン〔orツ〕ドン（若い人）とバッテン（年配の人）の両型が並存している。

⑩ 読むから〔順接〕＝ヨムケン〔orケー〕（大部分）　ヨムテ〔orデ〕（豆酘）

⑪ 本を〔目的格〕＝ホンヲバ（大部分）　ホンバ（比田勝）　ホンノ（久和・内院）

⑫ 東風＝コチ（大部分）　コチカゼ（鰐浦・豆酘）　マコチ（久和）

⑬ 南東風＝オシャナ（佐護・比田勝・阿連・豆酘など周辺部に多い）　ハエコチ（伊奈・雞知・竹敷・小浦）—cf. 厳原など中央部では、特別の語形をもたない所が多い。

⑭ 北西風＝アナジ（大部分）　キタニシ（舟志）

⑮ 昨夜＝ヨンベ（多い）　ヨーベ（唐舟志・内山・内院・瀬）　キノンバン（竹敷・浅藻—cf. 多くの地域では、キノンバンが一昨夜を意味する）

⑯ 明々後日＝シアサッテ（大部分）　シェーテ（久根田舎）—cf. 内院では、セーテが、一昨々日を意味する

⑰ 夕方＝ヨサリ（多い。周辺部各地では語末母音が弱化する）　ヨーベ（仁位）　マグレ（佐護・雞知）　オテマグレ（舟志・内院）

⑱ 終日＝ヒガナ（orラ）イチニチ（多い）　ヒガナジュー（阿連）　ヒガナホドキ（内院）　ヒシテジユー（比田勝・舟志・久和・内院）

⑲ 隔日に＝ヒシテアイオキ（多い。アイはエーとなる地域が多い）　ヒシテオキ（比田勝・舟志・内院・豆酘）　ヒシテビシテ（鰐浦・佐須奈・仁位・小茂田）　ヒシテゴシ（比田勝）　ヒシテガーシー（佐護・今里）

⑳ 藪＝ヤボ（多い）　ヤブゾー（豊・佐須奈・琴）　ヤブ（厳原・浅藻）

㉑ 崖＝オテギシ（大部分）　キッテオトシ（多い。オテギシよりも急な斜面を意味するのか）　オービラ（阿連）　ギシ（久根）

㉒ 田＝タ（多い）　タバル（佐須奈・琴・仁田・仁位・小茂田）

㉓ 畑＝ハタケ（多い）　ヤマ（比田勝・小船越・雞知・竹敷・久和）　タニ（小茂田）―cf.『日本言語地図』188図では、対馬すべてハタケ形になっている。

㉔ 砂＝スナ（多い）　ズナ（比田勝・佐護・小浦・久和〔古〕・内院〔古〕・瀬・豆酘）

㉕ 牝牛＝オナメ（大部分）　ウナメ（比田勝・伊奈・鹿見・志多留・廻）

㉖ 子牛＝メノコ（大部分）　ベベノコ（佐須奈）

㉗ 牡馬＝コマ（多い）　コマウマ（佐須奈・仁位・久根）　オトコウマ（雞知・竹敷・厳原）

㉘ 牝馬＝ゾーヤク（多い）　ダンマ（鰐浦・佐護・鹿見〔古〕・竹敷・雞知・今里〔新〕・内院）　コバン（雞知。或は牡馬の誤りか）

㉙ 鼻＝ネコドリ（多い。豆酘・久根など各地で、語末母音弱化）　ネコブッロー（阿連）　シモヨビ（津和原・佐須奈・佐護・舟志・琴・葦見・伊奈・鹿見・三根・小船越〔古〕）　シミー（琴・三根）　ユーメ（仁田）　コーキチ（浅藻）

㉚ みそざい＝カンチュッチュー（小浦）　カンチュー（比田勝・佐須奈）　カンチュッチュクサンゼー（佐護）　カンチュクチュク（久和）　カンスズメ（久和・内院）　クソカッチョー（雞知）

㉛ 魚＝サカナ（多い）　イオ（多い）　ヨー（佐須奈・久根）　ユー（曲・内院）―cf. 豆酘・久和・久根・内院など若干の地域では、魚を一般にイオと言うが、多くの地域では、サカナ・イオが並存しており、その関係は複雑である。例えば、「大きい魚をイオと言うが、小さい魚でもたくさん集っている時はイオと言う」「タイノイオ・クロイオなど特定の魚をイオと言う」等々、その説明もまちまちであった。『日本言語地図』216図では、「対馬方言のイオ・ウオ形はいずれも、標準語意識を伴う」とされているが、イオは生粋の方言形と見なされる。

㉜ 石亀＝コーズ（多い）　コージ（佐護・吉田・木坂）　コーゾ（琴）　コンドロ（鹿見・志多留・仁田）　コ

ンバジョー（津柳）　ドンガメ（舟志・小船越）　イシガメ（豆酘）

㉝ 海老〔小さいもの〕＝エンビ（多い）　エッピ（吉田・木坂）　オトジョー（内院）—cf. 大きい海老は大ていエビカネという。

㉞ 蟹＝カニ（多い）　ガン（比田勝・佐須奈・佐護・小浦・曲・今里・阿連・久田・久和・内院・豆酘）　ガニ〔orネ〕（比田勝・雞知・小浦）　ツガン（仁位・阿連・小茂田・久根）　ツガニ〔orネ〕（今里・阿連）　ガッソー（久根・久和）

㉟ 蛇＝ナガムシ（大部分）　ナガタロー（佐須奈・久和）

㊱ 蝮〔及びそれに準ずる毒蛇〕＝ヒラクチ（大部分）—cf. ヒビラクチ（伊奈・鹿見・櫛）とか、チャビラクチ（唐舟志・津和原）などの各種もあるらしい。ヒバカリ（周辺部各地に多い。「ヒバカリはヒラクチより小さいが猛毒」という様な説明があった）

㊲ 無毒の赤い蛇＝アキュリョー（比田勝・唐舟志・津和原・佐護・琴・伊奈・鹿見・三根・水崎）　アクリョー（志多留）

㊳ とかげ＝トカゲ（中央部に多い）　トカギリ（舟志・佐須奈・佐護・今里・阿連・内院）　トーゲ（豆酘）

㊴ 蛙＝ヒキ（多い）　ビキ（比田勝・鹿見・廻・唐州・今里・阿連・小茂田・上槻・久根・久田・久和・安神・内院）　ビキジョー（佐須奈・舟志・仁田・三根）　ヒキチ（大船越）　ワクドービキ（今里）

㊵ お玉杓子＝ゲール（多い）　ゲリ（琴）

㊶ 蝸牛＝デンデンムシ（大部分）　デーロ（内山）　ゴーナ（久根・豆酘）　ヤドカリ（上槻）

㊷ 蝶＝チョーチョ（多い）　チューチュ（佐須奈・舟志・今里・阿連・小茂田・久根・豆酘）

㊸ 毛虫＝ヒゲムシ（多い）　オコゼ（津和原・佐護・琴）

㊹ 蜻蛉＝エンバ（大部分）　エンバイ（豆酘）　トンボ（比田勝・水崎・雞知・久和・浅藻）

㊺ 蟷螂＝オガマナトーサン（多い）　オガメ（久和・久根・豆酘）　オガム（厳原・阿連）　オガンボ（雞知）　シラメハギ（佐須奈・仁位・今里）　ソーバックリ（仁位）

㊻ 飛蝗〔蝗と混同している場合もあり得る〕＝チョンマ（舟志・仁田・加志・三根・雞知・今里・阿連・小茂田）　キョンマ（仁位・貝口・小船越・阿連・久田・豆酘瀬）　ゴンマ（豆酘）　トビムシ（内山）　トンムシ（鰐浦・琴・内院）　トベトベ（久和）　トンボ（琴・伊奈・内院）　ハタンマ（小茂田）　キチキチ（久根）　キチハタ（上槻）　キチキチダカ（瀬・豆酘）　ギース（浅藻）

㊼ 蜘蛛（大きいもの）＝ジョーラ（多い）　ジョーロ（琴・三根・廻・久根・瀬・豆酘）　ジョール（久根田舎）　ゾーラ（三根）　キンコブ（小船越・内院）　チョーセンコブ（比田勝・久和）

㊽ 蟻＝アリムシ（多い。鰐浦・佐須奈・貝口・久根・上槻などでは第二拍母音弱化。阿連・豆酘では第二拍がj音になる）　アリゾー（三根）　アットー（豆酘）　アリ（浅藻）

㊾ 尾＝シリホ（多い）　シリョー（豆酘）

㊿ 松毬＝マ（ッ）ツングリ（多い。周辺部各地では語末母音弱化）　ツングリ（津和原・佐護・仁位・小船越・雞知・小浦・浅藻）　フングリ（佐須奈）―cf.『日本言語地図』247図では、佐須奈もマツングリ形である。

(51) 桑実＝クワンミ（多い）　クワイチゴ（三根・佐賀・加志・廻・内院）　クワンナル（阿連）　ナリ（舟志）　ズミ（貝口・水崎・洲藻）　ジュミ（櫛）　クゥズン（久根・上槻）　パズン（津和原・伊奈）　パジュン（豆酘）　パンズ（佐護）

(52) 蕗苔＝カンドー（かなり多い。今里・内院・瀬・豆酘など各地では、第一拍がクワ（kwa）音になる）　カンゾー（舟志）　フキナ（久和）　フキントー（豆酘）

(53) 土筆＝ツクシ（多い）　ツクツクボーシ（比田勝）　ツクシンボ（佐護・仁位）　マツバントー（今里）　マ

ツナントー（仁位）　マツバグサ（雞知・小茂田）

㊹　玉蜀黍＝トーキビ（大部分）　キビ（仁田・厳原）

㊺　きのこ＝ナバ（大部分。cf．比田勝・佐護・舟志などでは、ナバが椎茸を意味する）

㊻　南瓜＝ボーブラ（大部分。久根・上槻などでは第三拍母音が弱化して促音となる）　ボンブラ（比田勝・佐須奈・佐護・湊・伊奈・仁田・三根）

㊼　甘藷＝コーコ〔イ〕モ（大部分）　コイコイモ（雞知）　トーイモ（瀬・豆酘）　ゲンキイモ（内山）　イモ（小茂田・浅藻）

㊽　虎杖＝ズイコ（多い）　ズイコン（阿連・小茂田）　ジーコ（鰐浦・久和・豆酘）　ズイノコ（竹敷）　ズイ（久根）　シーシバ（佐賀）　タドリ（佐須奈・内院）　ポンポン（比田勝・佐須奈・佐護・舟志）

㊾　曼珠沙華＝ヒガンバナ（多い）　ソーレンバナ（小浦・今里・阿連・内院）　シレーバナ（久根）　テクサレバナ（雞知）　テハレグサ（久和・内院）

㊿　鳳仙花＝トーバナ（大部分）　ホーセンカ（久根・豆酘）

(61)　葛根＝カンネ（多い。今里などは第一拍が kwa となる）　カズラネ（佐護）　カンランネ（久根田舎）　カンネカズラ（内院）　カズマキ（久和）　イチロー（佐須奈）

(62)　父＝トト（大部分）―cf．丁寧語形としては、トトサマ・トトヤン・（オ）トッツアン等があるが、それらの間には、地域差の他、位相差も複雑にからみ合う。例えば、トトサマとトトヤンの関係を見ても、久田では後者が百姓の言葉（前者は士族の言葉）であり、久和では、後者が老人語であるらしい。また、豆酘では、オトッツアンが士族の言葉であるという。

(63)　母＝カカ（多い）　タタ（多い、前者に比し上品）―cf．カカとタタの関係は、地域差よりもむしろ、位相差が著しい。また、丁寧語形としては、それぞれに、ママ・ヤンなどを付するが、その関係は概ね、前記「父」の場合に準ずる。

(64) 兄＝ババー（大部分）　ババブー（安神・久根）　バーボ（上槻）—cf. 丁寧語形としては、アンサマ・アンヤン・アイヤンなどの形が多い。豆酘・今里などではバボーサマの形もあるというが、これは余り広くないらしい。

(65) 弟＝オトッチョー（多い）　オトジョー（今里・内院）

(66) 玄孫＝ヤシワマゴ（多い）　ヤシャマゴ（琴・廻）　ヤシマゴ（津和原・仁位・雞知・豆酘）　ヤスマゴ（鹿見・阿連）　ヤシバマゴ（今里）　カシワマゴ（久根）　ツルマゴ（鰐浦・佐須奈）—cf. ツルマゴを「玄孫の子」と説明する人もあるが、「玄孫」の意に用いる人もかなり存する。

(67) 親戚＝シンルイ（多い）　シンシェキ（仁位・小浦・阿連・久和）　イトコ（比田勝・佐護・舟志・雞知・今里・阿連・豆酘）　ミウチ（内院）

(68) 欲ばり〔吝嗇者〕＝ガンドー〔モン〕（多い）　ヨッガンドー（小浦・今里）　ヨクドーガン（仁位）　ヨクドーラン（竹敷）　ヨクドース（久和）　ヨクズラ（瀬・豆酘）　ヨコズナ（小茂田）　ヨクゼー（瀬〔新〕）　ニギリ（今里・内院〔新〕）　ニビ（今里）　イシクジリ（今里）

(69) 金持＝オヤカタ（多い）　ヤンバン（比田勝・佐護・久和）

(70) 乞食＝ホイト（多い。—cf. 久田・久根・内院・瀬・豆酘などでは、ホイトがけんか言葉として用いられ、また、貝口・安神・久根・上槻などではお供物の意に用いられる）　ゼンモン（鰐浦・豊）　ヌスット（久根・瀬）

(71) 私生児＝テテナシゴ（多い）　ノゴ（佐護・舟志・阿連・久和）　ヨベーゴ（佐護・久和・内院）　ヒリゴ（佐護）　カゲゴ（豆酘）

(72) 額＝シテーグチ（多い）　ヒテーグチ（比田勝・仁位・小浦・久田）　デビテー（久根）

(73) 旋毛＝ギリギリ（大部分）　ツジ（佐須奈・仁田・小茂田・豆酘）

⑭ 唇＝クッツバ（多い） クチバ（仁位・久田） クチバタ（大船越） クチビラ（琴） ツバ（舟志・仁位）—cf.『日本言語地図』116図では、ツバ・クチバ・クチバタ等がなく、クッツバとクチビル（下県地域）の両形が示される。クチビルは共通語的用法と見るべきか。

⑮ 顎＝アゴ（多い） アギ（仁位・小茂田・久根）、アグ（雞知・豆酘） アギタ（鰐浦・佐須奈・佐護・大船越・久和・内院・豆酘） アグタ（比田勝・琴・舟志・仁田）—cf. アゴとアギタ（orアグタ）両形の並存地域では、後者が下品な感じであるらしい。

⑯ 顔＝ツラ（大部分） カバチ（久根） ガンツキ（比田勝） カバ（阿連）—cf.『日本言語地図』106図では、カバチ・ガンツキなどがなく、ツラ・カオの両形が示されている。カオは共通語的用法と見るべきか。

⑰ 眉毛＝マイゲ（大部分。メーゲの如き形をとる事が多い） マヒゲ（仁位・雞知）

⑱ 咽喉＝ノドンス（大部分） ノード（豆酘） ノドブエ（仁位・今里・小茂田）

⑲ 臂＝ヒンシリ（多い） ヒンジリ（貝口・小船越） ヒンシ（吉田） ヒジシリ（豆酘） ヒジデ（久根） ヒンギシ（狩尾・木坂・津柳）

⑳ すね＝コーゲーズネ（多い） ムコーズネ（比田勝・雞知・久和） エダ（雞知・久根・豆酘） エダブシ（久根）

㉑ 臀＝シッタブラ（大部分） ケッタブラ（今里・阿連・小浦・久和・久根・内院） シリベタ（仁位）

㉒ 病気＝ヤンメー（大部分）—cf. 佐護・久和・豆酘などでは、ヤンメー（orヤマイ）が伝染病のみを意味する。また、多くの地方で、ヤ¦ンメ（尾高型、眼病の意）とヤ¦ンメ（頭高型、病気の意）とが、アクセントで区別される。

㉓ 啞＝ユーシ（大部分） ウグシ（浅藻） アッパン（佐須・小茂田） ツンボ（小浦・久和・内院）

㉔ 袖無し＝チャンチャンコ（多い） カタスケ（比田勝・佐護・舟志）

㉕ 筒袖〔orそれに準ずる仕事着〕＝ツッポ〔ソデ〕（多い） テッポソデ（瑩見・安神・内院・豆酘） スッポソデ（豆

酘）テクリ（安神）テクッ（久根）チクリ（佐護）トージン（瀬・豆酘）トンジン（内院）ハギトージン〔継ぎはぎの仕事着〕（久根・上槻・内山・瀬・豆酘）テッポトージン（内山）ハンチャ（貝口・内山・久根・瀬・豆酘）

⑧⑥ 褌＝ヘコ（大部分）マワシ（今里）フンドシ（仁位）

⑧⑦ 襁褓＝シメシ（大部分）シタシ（小船越・久根・上槻・瀬・豆酘）

⑧⑧ 刺身＝ナマミ（多い）ナマイオ（久根・豆酘）ブエン（津和原・琴・貝口・小船越・久根・上槻・安神）セギリ（比田勝・舟志・貝口・久和・内院）スギリ（内山〔古〕・内院）サシミ（小茂田・浅藻）

⑧⑨ 土間＝ドージ（大部分）ドージョー（佐須奈）

⑨⓪ 台所＝ナガシ（多い）ダシ（比田勝・佐護）タナモト（舟志・久和・内院）

⑨① 末座〔囲炉裏を囲んで坐る場所〕＝キジリ（多い）シビチラ（久根浜）シビッデー（安神）

⑨② 井戸＝イド（多い）ツツミ（久根・上槻・内院・豆酘―概ね、語末母音の弱化が著しい）チチン（久和〔古〕・安神〔古〕・内院）ツ〔orチ〕チー（舟志・阿連・小茂田・久根）カワ（小船越・小茂田―cf. 川と区別する為、ツボカワ・イガワ等と言う事がある。これに対し、川をナガレガワと言う）カマ（大船越・豆酘）―cf.『日本言語地図』197図では、豆酘のツチー形以外、すべてイド形として示される。

⑨③ 松葉＝タテクサ（多い）シバ（佐須奈・伊奈・加志）オテバ（安神）マツバ（豆酘）コノハ（瀬）エベラ（琴）イボラ（小船越）

⑨④ 俎板＝マナイタ（多い）キリバン（津和原・佐護・伊奈・鹿見・廻・仁位・小船越・雞知・内院）―cf.『日本言語地図』164図ではすべてマナイタ形。

⑨⑤ すりこ木＝スリコギ（大部分。第二拍は促音化する地域が多い）レンギ（久根・上槻）―cf.『日本言語地図』163図ではすべてスリ〔orツ〕コギ形。

⑯ 櫃＝メシツギ（多い。南部では語末母音弱化傾向）　ハンボン（豆酘）　ハンブン（瀬〔老人〕）　イビツ（安神・久根）　コバチ（津和原・唐舟志・琴）　オヒツ（浅藻）

⑰ 笊＝ショーケ（大部分―豆酘では、目の細かいものをショーケと言い、目の粗いものをザルと言う）　タカゲ（舟志。小さいものを言う）

⑱ 五徳＝カノー（多い）　カナワ（佐護・仁位）―cf. 大きいものをカノー〔orカノーサマ〕と言い、小さいものをゴトクと言う地点が多い。

⑲ 十能＝ヒカキ（大部分）　オツカキ（大部分）　ジューノー（比田勝・佐護）―cf. 多くの地域で、ヒカキ・オツカキ両形が並存しているが、一おう、後者を古しとする様である。

⑳ 篭＝スカリ（多い。周辺部では語末母音の弱化傾向あり）　テボ（多い）　スカルテボ（佐須奈）　カケテボ（佐護・琴・貝口・久和・瀬）　カレーテボ（久田）―cf. スカリは大きい篭を指すとか、背負い篭を指すとかいう説明があった。

右記それぞれに、形や用途の差があるのかもしれない。

(101) 桶＝タゴ（大部分―大きいものはコガと言って、タゴと区別される地域もある）　ヒョーゴ（久和）

(102) 束子＝ソーラ（多い）　ショーラ（大浦）　ササラ（豆酘）

(103) 木槌＝カケヤ（多い）　サイコンズチ（久和・内院・浅藻）　サイズチ（内院）　サシズツ（瀬・豆酘）　サスズ（佐護・仁位・今里）　サッス（佐須奈）　ヨコズチ（比田勝）　モクズチ（久和）　ドンズ（阿連）

(104) 鍬＝クワ（大部分。周辺部では、しばしばkwaの如く発音される）　パ（久和・内院・瀬）

(105) 案山子＝オドシ（多い）　トルオドシ（琴）　カガシ（久根・上槻・安神・瀬・浅藻・豆酘）　カボシ（内山・内院・豆酘）

(106) お手玉＝オジャミ（多い）　タマ（津和原・佐須奈・佐護・舟志・伊奈・櫛・仁位・曲・小茂田・久根・上槻

・内山・内院・瀬）　フセ〔ダマ〕（琴・仁田・鹿見・三根・豆酘）―cf.『日本言語地図』145図では、厳原にオテダマ形が示されているが、共通語的用法であろうか。

（107）隠鬼＝カクレオニ（多い）　ゴジューカクレ（佐須奈・三根）　ゴジューカゴミ（佐護・舟志・加志）　カゴミ（佐護）

（108）鬼ごっこ＝セメセメ（比田勝・豊・佐護・佐須奈）　セメゴト（佐須奈）　ツカマエゴト（櫛）　ツカマエオニ（伊奈・三根）

（109）胡坐＝テッチョ（多い）　デッチョ（久和）　ケッチョ（琴・貝口）　ゲンガタ（久和・内山・内院・瀬・豆酘）　ゲンザ（琴）　ドンザ（竹敷）　オトコイドリ（佐護・小船越・久根・上槻・内山・安神・瀬）　オトコセイ（上槻）　ハチカル（小綱。動詞形としての用法）

（110）私＝オレ（大部分。語末母音は弱化消滅する地域が多い―オッド・オイド・オンド・ンド等の語形は、オレドモの如き複数形に出自するらしいが、私の意味に用いる地域も多い様である。一般的に、オッドン・オイドン・ンダチ等の場合は、複数的表現に用いるという説明が多かったが、オッド・オイド・オンド等に関する説明は、まちまちであった。オンドは女性に多く、オッドは男性に多いという様な位相差も認められる）　ワシ（内山・浅藻など各地で用いる）

（111）あなた＝ンナ（大部分）　オシ（大部分）　ワレ（周辺部各地）―cf.これらの地域差は難しいが、オシが最もおとなしい感じでよく用いられる。ワレは待遇度の低い表現で、厳原など中央部には多くない様である。オドレは更に待遇度が低く、或種のけんか口調である。ンナは、オシとワレとの中間的性格の語と言えようか。下県より上県にやや多い様である。

（112）驚く＝タマガル（大部分）　タマゲル（久根〔古〕）　ビックリスル（仁位）

（113）叱る＝ガル（大部分）　オゴル（今里・内院）

（114）歩く＝アユム（大部分）　アルク（多い。アユムより新しい）　カチカライク（多い。歩いて行く意）

(115) 走る＝ハシル（多い）　トブ（多い）　オロタエル（久根・豆酘）
(116) からかう＝セカス（多い）　セブラカス（久和）　セレバカス（今里・阿連）　アヤス（佐護・仁位・今里）　エラカス（比田勝・佐護・久和）
(117) 叩く＝シワク（多い）　シバク（浅藻）
(118) 投げる＝ホタル（大部分）　ホッツケル（比田勝）—cf. ナゲル・ナグルの形もかなり存するが、豆酘などでは、ホタルより、ナゲルの方が、遠くへ投げる感じであるらしい。
(119) 与える＝クルル（大部分。下一段式のクレル形をとる所も多い）—cf. 共通語のヤルに対応するクル（orレ）ル形は、行クに対するクル形の場合に似ている。
(120) 腐る＝ヨワル（多い）　ネマル（比田勝・佐護・舟志・阿連・久和・久根・内院）—cf. 飯などはネマルと言い、魚などはヨワルと言う様な地域が多い。
(121) 落ちる（木実など）＝アエル（大部分。豆酘など、下二段式のアユル形を用いる所もある）
(122) 潜る＝カツグ（大部分）　カセグ（奴加岳・小浦・曲）　コンブル（浅藻）　ツカル（浅藻）
(123) まじめな＝マッスギー（多い）　マッテー（多い）　カテー（佐護）
(124) きれいな＝リッパナ（大部分）　テーテー（久和）
(125) 小さい＝コメー（大部分）　チョッコメー（多い）
(126) 未熟な〔果物など〕＝ナマシー（大部分）　ウンドラン（比田勝・佐護）
(127) だるい＝ダリー（多い。ダルイ・ヒダルイ等の形をとる所もある）　ダラシー（仁位・今里・阿連）　ヒムシー（久根）
(128) たくさん＝ギョーニ（大部分。—比田勝・佐護・舟志・内院などではギョーンの形をとる）
(129) さようなら〔別れ〕＝ザトーヤ（多い）　ザトーナ（小船越〔古〕・小浦・久和）　オイザットナーシャレマセ

（舟志）

（注）本稿の場合、方言語彙ー特に意義素的語形式の配列は概ね、東条操氏『簡約方言手帖』（郷土研究社、昭6）のそれに従った。私の調査が大体それによった為である。項目の配列順のみを示すと次の如くである。㈠天文地理　㈡動物植物　㈢人倫支体　㈣衣食住　㈤人事年中行事　㈥雑　㈦名詞以外の諸詞。

なお、音韻（アクセント）や形態素的現象ー用言の活用や付属語の用法などーは、一おう、意義素的語形式の前に配列した。

二―一　地域差に関する問題点

勿論、島一般を通じて概ね共通な方言形もかなり存する。例えば、左記㈠項諸例の如き方言形は概ね、島全体を通じて認められる様である。

ただ、ここで注意すべきは、《無い》という発言が非常に難しいという事。以下の場合も、所詮、筆者の調査の結果として、それら以外の方言形が認められなかったというにすぎない。実際問題としては、調査の不完全さという様な面があり得るのかもしれない。現に、左記㈡の如き場合、『日本言語地図』では、島全体が一つの方言形で示されているのに対し、筆者の調査ではかなりの地域差が認められたという次第である。

更に、左記㈠の場合においても、これらの方言形に対立する共通語形が、各地で認められる事言をまつまい。左記㈠の諸例においても、『日本言語地図』その他を考慮しつゝ、共通語形との関係など、そのユレを適宜注記した。

また、前述浅藻・水崎などのいわゆる開拓者寄留者部落では、しばしば左記以外の方言ーすなわち非対馬的方言形が認められる様である。

㈠　概ね島一般に認められる方言形

①書くゴタル（ようだ）　②書いツロー（だろう）　③山ジャ（指定辞）　④高うシテ（高くて）　⑤ナシテ（な

ぜ）　⑥書くタッチャ（書いても）　⑦皮ゴシ食う（皮ごと）　⑧百円シコ（百円ばかり）　⑨百円ハカ（百円しか）　⑩柿テロン（並列助詞）　⑪厳原サメ（厳原へ。サネ・サニ・サンの如き形をとる事もある）　⑫ニシ（西風）　⑬ハエ（南風。ヘーの如き発音が多い）　⑭コッテー（牡牛）　⑮コブ（小さい蜘蛛。『日本言語地図』233図では、各地にクモ形が示されているが、共通語的用法と見るべきか）　⑯トーガキ（無花果）　⑰ネネ（姉。丁寧語形としてはネネサマ・ネネヤンなど。その他、アネの形も若干得られたが共通語的用法かもしれない）　⑱ゴテー（腕。「肩から手首の間をゴテーと言い、手首をウデと言う」の如き説明をする人もあったが、ゴテーとウデとの間に、或程度の地域差があるのかもしれない）　⑲キッカケ（家の庇）　⑳セッチン（便所）　㉑ヨキ（斧。周辺部ではしばしば語末母音が弱化）　㉒オラブ（呼ぶ）　㉓オドロク（目覚める）　㉔イドル（坐る）　㉕ヨセル（集める。周辺部ではヨスル形もある）　㉖カラウ（背負う。周辺部ではカロー形も）　㉗パル（掘る）　㉘エーラシー（可愛い）　㉙ヌキー（暖い。所によりヌクイ形も）　㉚ヒエー（寒い。所によりシエー・ヒヤイなども）　㉛フテー（太い。所によりフトイ形もある。なお、『日本言語地図』17図では、佐須奈・仁位・厳原にオオキイ〔orナ〕形が示されているが、共通語的用法かと思われる）　㉜サエン（不味い）

(ロ)　『日本言語地図』では、島内概ね同一方言形として示されるが、実際問題として、或程度の地域差が認められるものの一例

①　畑＝第188図ではすべてハタケ形―実際は、ヤマ（各地）・タニ（小茂田）などの形もある。

②　魚＝第216図では、標準語的なウオ形以外概ねサカナ形―実際は、イオ・ユーなどの形がかなり多く認められる。

③　蛇＝第226図ではすべてナガムシ形―実際は、ナガタロー（佐須奈・久和）の如き形もあり、その他、種類によっていろんな語形が認められる。

④　蝮＝第228図ではすべてヒラクチ形―実際は、各地でヒビラクチ・チャビラクチなどの形もあり、また、ヒバカ

リを蝮の意味に用いる所もある。

⑤　蜻蛉＝第231図ではすべてエンバ形―実際は、エンバイ(豆酘)形もあり、また、各地で認められるトンボ形も、そのすべてが共通語的用法であるとは限らない。

⑥　松毬＝第247図ではすべて〔マ〕ツングリ形―実際はフングリ（佐須奈）などの形もある。

⑦　唇＝第116図では、共通語的なクチビル形を除きすべてクッツバ形―実際は、クチバ（仁位・久田）、クチバタ（大船越）、クチビラ（琴）、ツバ（舟志・仁位）などの形もある。

⑧　顔＝第106図では、共通語的なカオ形以外すべてツラ形―実際は、カバチ（久根）、カバ（阿連）、ガンツキ（比田勝）などの形もある。

⑨　井戸＝第197図では、豆酘のツチー形以外すべてイド形―実際は、下県各地にツツミ・ツチー・ツチン・カワ・カマ等の形が多い。

⑩　俎板＝第164図ではすべてマナイタ形―実際は、周辺部にキリバン形がかなり存する。

⑪　すりこ木＝第163図ではすべてスリ〔orツ〕コギ形―実際は、下県にレンギ形がかなり存する。

三　対馬方言の特異性

全国的に見た場合、対馬方言の性格は如何に。

先ず、「全国的に見て、対馬方言は珍しい現象が少い」（『人文』1号65頁）かどうかであるが、これは甚だ難問題である。第一、《珍しい》ということの意味自体があいまいなのである。

その辺今後にまつ所が多いわけであるが、ごく概括的に見ても、対馬方言には、下記①～⑰の如く、他地域に余り例のないものが相当認められる。尤も、下記の如きも所詮、『日本言語地図』『全国方言辞典』『分類方言辞典』をはじめ諸方言書において、比較的稀であるという事。実際問題としては、必ずしも珍しくない現象が含まれているかもしれないわけである。

① 厳原など対馬大部分のアクセント―例えば、二拍名詞のアクセント体系は次の如くであるが、これは一寸珍らしそうである。

一・二・四・五類	三類
●○▽	●○▽（犬・足） ○●▽（花・山）

（注）本稿のアクセント表記において、●は高い音を示し、○は低い音を示す。▼や▽は、ガ・ヲ・ニなどの格助詞を示す。

厳原アクセントにおける一・二・四・五類対三類という対立自体は、平山輝男氏（『九州方言音調の研究』）や金田一春彦氏（『人文』1号78頁）の説かれる如く、壱岐西北部方言の場合と一致するが、アクセント型の姿はかなり異っている。壱岐西北部では、三類がすべて○●▽型となり、厳原アクセントの如く、第二拍の母音によって型がユレるという様な事はない。

② 語中尾リ・ル（時にはレも）の音＝豆酘・阿連では、アイ（蟻）・コイ（これ）の如く、イ(j)音に発音される傾向が著しい―cf. 鹿児島県や肥前の一部、山形県・新潟県の一部、宮古島の一部などでもリ・ルがイになる傾向があると言われるが、それぞれ、豆酘方言の場合とは、多少とも事情を異にする様である。

③ 夕方＝オテマグレ（舟志・内院）―cf. マグレは他でもかなり存する。 同＝ヨーベ（仁位）―cf. 昨夜の意のヨーベは、対馬以外でもよく用いられるが、夕方の意には余り使用されないのか。

④ 終日＝ヒガナホドキ（内院）—cf. ヒガナヒジュー・ヒガナヒシチなどの形は九州各地にある。

⑤ 隔日＝ヒシテビシテ（鰐浦・佐須奈・仁位・小茂田）—cf. ヒシテゴシ・ヒシテガイなどの形は、対馬以外にもある。

⑥ 十一月＝シモツキ（多い）—cf. 各地で使われるのかもしれないが、余り報告されていない。

⑦ 十二月＝シワス（多い）—cf. 同右

⑧ 崖＝オービラ（阿連）—cf. ヒラ・ヒラコの如き形は各地にある。

⑨ 藪＝ヤブゾー（豊・佐須奈・佐護）

⑩ 牝馬＝コバン（雞知）—cf. 牡馬の誤りか。牡馬の意のコマウマは各地にある。

⑪ 梟＝シモヨビ（上県に多い）　同＝シミー（琴・三根）　同＝ユーメ（仁田）

⑫ せきれい＝イワシカキ（小茂田）—cf. イワタタキは関東地方にもある。　同＝イソカッチョー（仁田）—cf. 百舌鳥の意のカッチューは北九州などにもある。

⑬ みそさざい＝カンチュッチュクサンゼー（佐護）　同＝カンチュー（比田勝・佐須奈）　同＝クソカッチョー（雞知）

⑭ 雞冠＝カムロ（豆酘）　同＝カモリ（琴・雞知）—cf. カンムリは大分県などにある。

⑮ 石亀＝コンドロ（鹿見・仁田・志多留）　同＝コンバジョー（津柳）

⑯ 海老〔小〕＝オトジョー（内院）　同＝エッピ（吉田・木坂）

⑰ 蛙＝ヒキチ（大船越）—cf. ヒキやビキチョーなどの形は各地にある。

⑱ 蛇（無毒の赤いもの）＝アキュリョー（上県各地）　同＝アクリョー（志多留）

⑲ 蜥蜴＝トーゲ（豆酘）

⑳ 蝸牛＝ヤドカリ（上槻）　同＝ゴーナ（久根・豆酘）―cf. 普通はやどかりを指す。

㉑ 毛虫＝オコゼ（津和原・佐護・琴）

㉒ 蟷螂＝ソーバツクリ（仁位）　同＝カミナリドン（琴）　同＝シラメハギ（佐須奈・仁位・今里）―cf. シラメドリは伊豆大島など。

㉓ 飛蝗＝チョンマ（名地）　同＝キョンマ（下県各地）　同＝ゴンマ（豆酘）　同＝トベトベ（久和）―cf. トンブシその他の形は岐阜県など各地にある　同＝キチハタ（上槻）　同＝キチキチ（久根）　同＝キチキチダカ（瀬・豆酘）―cf. キチンボ・ギッチョなどの形は栃木県その他各地にある。

㉔ 蜘蛛〔大〕＝ゾーラ（三根）　同＝ジョール（久根）―cf. ジョーロは土佐などにある　同＝チョーセンコブ（比田勝・久和）

㉕ 蟻＝アリゾー（三根）　同＝アットー（豆酘）

㉖ 桑実＝ナリ（舟志）―cf. 果物の意のナリは鬼界島など各地にある　同＝クワンナリ（阿連）　同＝パズン（津和原・伊奈）　同＝パジュン（豆酘）　同＝パンズ（佐護）―cf. クワズミの形は信州等各地にある。

㉗ 蕗苔＝フキナ（久和）―cf. フキノメなどの形は、千葉県その他にある。

㉘ 土筆＝マツバントー（今里）　同＝マツナントー（仁位）―cf マツノトー形は熊本県などにある。

㉙ 甘藷＝コーコ〔イ〕モ（大部分）　同＝コイコイモ（雞知）

㉚ 葛根＝イチロー（佐須奈）　同＝カズマキ（久和）―cf. 熊本県各地などでは葛をカズという。

㉛ 虎杖＝シーシバ（佐賀）―cf. イヌシバは山口県などにある。

㉜ 鳳仙花＝トーバナ（大部分）―cf. トビグサなどの形は大分県その他にある。

㉝ たんぽぽ＝テクサレバナ（厳原）―cf. 近畿など各地では、彼岸花の意。

㉞ 欲ばり＝ガンドー（大部分）―cf. 強盗の意のガンドーは奥羽など各地　同＝ヨクガンドー（小浦・今里）同＝ヨクドーガン（仁位）　同＝ヨクゼー（瀬）　同＝ヨコズナ（小茂田）―cf. ヨクズラその他の形は宮崎県などにある。

㉟ 吝嗇者＝ニビ（今里）

㊱ 金持ち＝ヤンバン（比田勝・佐護・久和）―cf. 朝鮮語出自形。

㊲ 咽喉＝ノード（豆酘）　同＝ノドンス（大部分）

㊳ 涎＝ヨナダイ（豆酘）

㊴ 臀＝ヒジデ（久根）　同＝ヒンギシ（狩尾・津柳）―cf. ヒンジキ・ヒンジシなどの形は九州各地にある。

㊵ 腕＝ゴテー（大部分）―cf. グテーは鬼界島等にある。

㊶ 脛＝コーゲーズネ（大部分）

㊷ 踝＝メクギ（仁位・厳原・豆酘）―cf. メヌキの形は遠江にある。

㊸ 尻＝ケッタブラ（下県）―cf. シッタブラは九州各地にある。

㊹ 筒袖〔orそれに準ずる仕事着〕＝トージン（瀬・豆酘）　同＝トンジン（内院）　同＝テッポトージン（内山）　同＝ハギトージン（久根・上槻・内山・瀬・豆酘）

㊺ 袖無し＝カタスケ（比田勝・佐護・舟志）―cf. 壱岐や九州各地でカタスケは肩当ての意。

㊻ 刺身＝セギリ（多い）　同＝スギリ（内山・内院）

㊼ 台所＝ダシ（比田勝・佐護）

㊽ 井戸＝ツツミ〔orン〕（下県南部）　同＝ツ〔orチ〕チー（舟志・阿連・小茂田・久根）―cf. ツツミは全国各地で池や沼の意。

㊾ 松の落葉＝イボラ（小船越）　同＝エベラ（琴）　同＝タテクサ（多い）

㊿ 飯櫃＝コバチ（津和原・唐舟志・琴）

(51) 笊＝タカゲ（舟志）―cf. 五島などでは飯篭の意。

(52) 背負篭＝スカリ〔orル〕（多い）―cf. 関東地方各地などでは網袋の意。

(53) 束子＝ササラ（豆酘）―cf. サワラは九州各地にある　同＝ショーラ（大浦）―cf. ソーラは西日本各地にある。

(54) 桶＝ヒョーゴ（久和）―cf. 洗米を入れる桶の意のショーケは滋賀県など。

(55) 木槌＝ドンズ（阿連）　同＝モクズチ（久和）　同＝サッス（佐須奈）―cf. サシズチは九州各地。

(56) 鍬＝パ（久和・内院・瀬）―cf. 南島黒島や波照間島でパイ・ペー。

(57) 案山子＝カボシ（内山・内院・豆酘）―cf. 長崎県西部にはカラストボシなど。

(58) お手玉＝フセ（琴・仁田・鹿見・三根・豆酘）

(59) 隠鬼＝ゴジューカゴミ（佐護・舟志・加志）―cf. ―カゴミは壱岐などにもある。

(60) 鬼ごっこ＝セメセメ（比田勝・豊・佐須奈・佐護）―cf. セメコの如き形は福島県その他にもある。　同＝トラバトリ（仁位）

(61) 竹馬＝ユキグミ（下県各地）　同＝ユキブミ（仁位）―cf. ユキアシ・ユキウマ・ユキゲタの如き形は、九州各地その他にある。

(62) 肩車＝テンクビ（琴）　同＝テンクマ（佐須奈・仁田・小茂田）―cf. テングルマは九州各地にある。

⑥③ 胡坐＝テッチョ（多い）　同＝ゲンガタ（下県南部）　同＝ゲンザ（琴）　同＝ドンザ（竹敷）
同＝オトコセー（上槻）

⑥④ 歩く＝アユム（大部分）

⑥⑤ 掘る＝パル（大部分）

⑥⑥ 潜る＝コンブル（浅藻）—cf. 水中を歩いて渡る意のコブルは山口県・高知県など。

⑤⑦ 美しい＝テーテー（久和）—cf. 八丈島でテーチケ。

⑥⑧ まじめな＝マッスギー（多い）

⑥⑨ さようなら〔別辞〕＝ザットーヤ（大部分）

四　対馬方言の系統—筑前方言との共通性

全国的に見て対馬方言はどの地方の方言に近いか—これまた難問題であるが、一おう、北九州特に筑前方言（一時代前の筑前方言をふくめて）に近いと言えようか。

先ず、対馬方言のアクセントは、平山輝男氏（『九州方言音調の研究』273頁〜）・金田一春彦氏（『対馬の自然と文化』91頁〜）説の如く、明らかに、壱岐及び筑前アクセントと酷似している。

(イ) 例えば、対馬諸方言における一拍名詞や動詞・形容詞のアクセントは、下記の如き一型であるが、これは、その型の姿までふくめて福岡（筑前式）アクセントと全く同様である。

一拍名詞＝●▽＝名が・菜が・碑が・日が・火が

二拍動詞＝●○＝突ク・付ク・鳴ル・成ル

三拍動詞＝○●○＝飾ル・隠ス・腫レル・晴レル

三拍形容詞＝○●○＝厚イ・暑イ・赤イ・白イ

(ロ) 二拍名詞などの場合は、下記①～④の如く、対馬諸方言アクセントと福岡アクセントとの間に或程度の差が認められるが、それも同系である事を否定する程のものではない。

① 対馬方言Ⅰ――厳原など大部分

ⓐ ○●▽＝三類の中、第二拍広母音のもの（池・色・山）　その他少数（酒・琴）

ⓑ ●○▽＝一・二・四・五類（梅・牛・石・川・息・笠・雨・猿）　三類の中、第二拍狭母音のもの（足・犬）

② 対馬方言Ⅱ――豆酘内院など下県南部

ⓐ ○●▽＝一・二・三類の中、第二拍が広母音のもの（風・庭・歌・川・池・山）その他少数（蜘蛛・猿）

ⓑ ●○▽＝四・五類の大部分及び、一・二・三類の中、第二拍が狭母音のもの（息・笠・雨・露・鳥・道・石・橋・犬・神）　その他少数（飴・皿・溝・人・村・雲）

③ 対馬方言Ⅲ――豆酘。主に年配の人

ⓐ ○○▼〔or○●▼〕＝一・二・三類の中、第二拍が狭母音のもの（鳥・道・石・橋・犬・神）　その他は稀。

ⓑ ○●▽＝一・二・三類の中、第二拍広母音のもの（風・庭・歌・川・池・山）　その他少数（蜘蛛・琴）

ⓒ ●○▽＝概ね四・五類（息・笠・雨・露）　その他は少数（溝・雲）

④ 福岡市

ⓐ ○●▽＝概ね一・二・三類（蟻・梅・石・川・犬・山）　その他少数（亀・琴）

ⓑ ●○▽＝概ね四・五類（息・糸・雨・猿）　その他（牛・柿・紙・弦・海苔・痣・孫―第二拍狭母音のもの）

めだつ様であるが、その辺なお検討を要する）

少くとも、豆酘や内院など下県南部のアクセントは、〔一・二・三類／四・五類〕という対立を示す点において、福岡アクセントと一致する。それらはおそらく、下記の如き過程を経て―つまり、福岡式における○●▽型の中、第二拍狭母音のものが、そのアクセント核を保ち得なくなって―成立したのであろう。

福岡式	
一・二・三類	四・五類
○ ● ▽	● ○ ▽

↓

豆酘式	
一・二・三類	四・五類
○●▽（庭） ○○▼（道）	● ○ ▽

↓

内院式	
一・二・三類	四・五類
○●▽（庭） ●○▽（道）	● ○ ▽

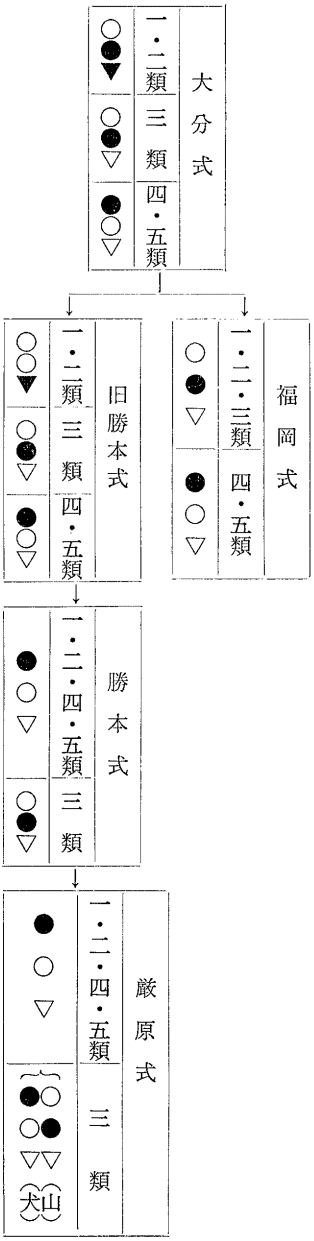
なお、金田一春彦氏（『人文』1号79頁・『対馬の自然と文化』97頁）は、福岡（筑前主流）方言における二拍名詞アクセントを、次の様に示していられる。

一・二類	三類	四・五類
○●▽（庭） ●○▽（道）	○ ● ▽	● ○ ▽

この説によれば、福岡式は、〔一・二類／三類／四・五類〕という対立を示す事になり、福岡式↓豆酘式という直接的な系譜関係は認められないわけであるが、私の調査（被調査者は、西区百道の堤和男氏大正七年生ーなど、年配の福岡人数名）結果に関する限り、一・二類と三類との間に、積極的な区別は認められなかった。

牛（一類）・紙（二類）の如きが●○▽型になる点は、金田一氏説を裏付ける様であるが、しかし、貝・靴・海苔など、三類語の●○▽型も或程度存する。また、痣・桑・孫など、第二拍広母音語にも●○▽型がかなり認められるのである。現在の福岡アクセントに関する限り、一おう、《一・二・三類を通じて概ね○●▽型、少数の例外が●○▽型になる》と見るべきであろう。

一方、厳原式アクセントの〔一・二・四・五類／三類〕という対立はかなり特殊な様であるが、しかし、その型の相から見た場合、○●▽型と●○▽型との二型式であり、いわゆる無核型（平板型）が存しない点、福岡式と同様である。系譜的には下記の如く、壱岐西北部（勝本）式に最も近く、福岡式とは従兄弟ぐらいの関係にたつものと見なされる。



アクセント以外の面に関しても、或程度同様の傾向性が認められそうである。

例えば、対馬諸方言では、左記の如く、共通語のクヮ（またはクワ）音に対応するパ音形がしばしば認められるが、この現象が、古い博多方言の特徴だった事は、ロドリゲスの夙に指摘している所なのである。

パ（←鍬（クヮ））＝久和・内院・瀬など。

パズ〔orジュ〕ン（←クヮズミ、桑実）＝津和原・伊奈・豆酘など。

四―一　豊前・筑前・肥前各方言との相関性

従来、対馬方言については、「音韻の面では筑前方言に近く、語法の面では豊前豊後方言に近い」（『人文』1号65頁）という様な説が有力であるが、音韻の面と語法の面との間にその様な差を認めるのは、一寸不合理に感じられる。

例えば、《対馬における形容詞語尾が、高カの如きカ形でなく、高イ（タケエ）の如きイ形である事を以て直ちに、豊日系と見なさ》れる場合があったわけであるが、しかし、筑前の東部―北九州市一部をはじめ、遠賀郡・宗像郡・直方市・飯塚市・山田市・鞍手郡・嘉穂郡・朝倉郡の全部または一部―や、筑後浮羽郡東部などでは、対馬と同様、イ語尾が有力なのである。

つまり、対馬方言は、その音韻・語法・語彙などいろんな面において、筑前方言と同様、《肥前など九州西北部と、豊前など東北部との中間的性格》が著しいわけである。そう言えば、前記筑前及び対馬・壱岐のアクセントなどにも、或意味で、《豊前の乙種式と肥前の二型（がた）式との中間的性格》が認められよう。

なお、九州方言については、従来、《東部の豊日式、西部の肥筑式、南部の薩隅式》の如く、三区分される事が多いが、筑前方言はむしろ、豊前式と肥前式の中間的なものと見なすべき事、金田一春彦氏説（NHKの『全国方言資料6巻』20頁）の如くなのである。

以下、やや蛇足ながら、対馬方言が、《豊前式と肥前式との中間的性格》という点において、筑前式に似ている例を、若干示してみよう。

① 上二段活用＝豆酘・佐護など対馬周辺部では、起クルの形が或程度存するが、島の中央部では多く、起キルの形が用いられる。—cf. 肥前では上二段活用が存しない。ただし、対馬の上二段式は、豊前方言の場合ほど著しいものではない。例えば、起クルはかなり存するが、落ツルの上二段式は少い（オチル又はオテル形が用いられる）点など、豊前式よりもむしろ筑前式に近い様である。

② 意志法＝起キョー（島大部分） 起キョー（厳原など）—cf. 肥前地方は起キュー形が著しく、また、豊前では共通語と同様の起キョー形が著しい。対馬大部分の起キョー形は、起キュー→起キョーの変化における中間形と見なされる。尤も、肥前などの起キュー形については、起キョー形からの変化形（o→uという一般的傾向が見られる）と見なす立場もあり得る故、なお検討を要する。

③ 敬語法＝来ラル〔ル〕（多い） コラシャル（三根・志多賀・櫛・佐賀・豆酘） キナハル（佐賀・小綱・厳原・小茂田）—cf. 一般に敬語辞の地域差は複雑であり、なお今後にまつ面も多いが、大局的にはやはり、筑前方言に近いと言えよう。

④ 逆接助詞＝バッテ（島周辺部） ケン〔orッ〕ドン（島中央部）—cf. 肥前など西九州はバッテン形が著しく、豊前など東九州はケンド形が著しい。しかして、筑前東部では、対馬と同様、両形が並存している様である。

⑤ 対格助詞＝本オバ（多い） 本オ〔or ノ〕（中央部） 本バ（比田勝など）—cf. 肥前など西部は本バ形が著しく、豊前は本オ形が著しい。対馬にはやはりその中間的性格が認められるのである。

⑥ ai連母音＝豆酘・伊奈など周辺部では、ヘー（蠅）・デーコン（大根）の如き融合変化形が著しいが、島中央部では概ね、ハイ・ダイコンの如く発音される。—cf. このエー（e:）形は、肥前（ja:形が多い）よりも豊前に近い。しかし、対馬の大部分において、ai→e:の傾向は豊前方言の場合程著しいものでなく、むしろ、筑前方言（ai連母音の変化著しくない）の状態に近い。

⑦ セ音＝豆酘など周辺部では、アシェ（aʃe. 汗）・シェ（ʃe. 瀬）の如き口蓋化音が著しいが、島中央部では概ねase・seの如く発音される。—cf. この状態も又、口蓋化音ʃeの著しい豊前方言や肥前西部方言よりもむしろ、筑前方言や肥前東部方言に近い。

更にこの場合、筑前方言との関係はさておき、対馬方言の形態素的特色—従来の説にいわゆる語法的特色—が、肥前など西北九州方言と、豊前など東北九州方言との何れに近いかを考えて見ても、左記(イ)(ロ)の如く、その両者が認められる。「対馬方言の語法的特色が、肥筑式より豊前式に近い」という様な事は、義理にも言えないわけである。

(イ) 対馬方言と肥前式方言との共通性

① 接続助詞シテ＝対馬は肥前方言などと同様、高ウシテ形が著しいが、豊前方言はむしろ、高ウテ（orチ）形が普通である。

② 準体助詞ト＝対馬は肥前方言などと同様、高イトガの如き準体助詞トが著しいが、豊前ではそれが稀である。むしろ、ソやスの形がしばしば認められる。

③　文末助詞＝対馬は肥前方言などと同様、バイ・タイの如き形が頻用されるが、豊前方言ではそれが稀である。

(ロ)　対馬方言と豊前式方言との共通性

①　丁寧法＝対馬は概ね、豊前方言などと同様済ミマセン形であり、肥前式の如き済ミマッセン形は稀である。

②　主格助詞＝肥前方言では主格ノ（orン）が著しいが、対馬は豊前方言などと同様、それが少い。

個々の語彙論的現象―特に意義素的な語形式―に関して、余り細かい地域差を論ずる事は難しいわけであるが、しかし、ごく大局的に見た場合、対馬方言の語彙はやはり、筑前など北九州方言との共通性―または類似性が注目されそうである。

下記①～㉓の如きは、対馬各地に認められる語形の中、筑前はじめ北九州方言との関係が著しいものの一例である。尤も、これらはあくまで、《相対的な立場において、南九州方言よりも北九州方言に多い》という事であり、《南九州方言に全く認められない》現象というわけではない。また、これは、南九州よりも北九州に多いというだけであり、《九州以外の諸方言に存しない》現象という様な意味でない事勿論である。

①梟＝ネコドリ（大部分）　②せきれい＝シリタタキ（佐須奈）　③蛇＝ナガムシ（大部分）　④蝮＝ヒラクチ（大部分）　⑤なめくじ＝ナメクジリ（大部分）　⑥蜻蛉＝エンバ（大部分）　⑦松毬＝マツングリ（大部分）　⑧甘藷＝トーイモ（豆酘）　⑨南瓜＝ボーブラ（大部分）　⑩どくだみ＝ジューワク（大部分）　⑪とげ〔棘〕＝イゲ（大部分）　⑫玄孫＝ヤシワマゴ（大部分。ヤシュワマゴ・ヤシャマゴなどの形もある）　⑬旋毛＝ギリギリ（大部分）　⑭唇＝クッツバ（大部分）　⑮顎＝アギ（仁位・小茂田・久根）　⑯踵＝キビシャ（大部分）・キビス（仁位）　⑰ものもらい＝イヌノクソ（大部分）　⑱垢＝コケ（佐須奈・佐護・仁位）　⑲筒袖＝テクリ（安神・久根）・チクリ（佐護）　⑳家の庇＝キッカケ（大部分）　㉑飯櫃＝イビツ（安神・久根）　㉒隠鬼＝カゴミ（佐護）・ゴジュー

カゴミ（舟志・加志）　㉓坐る＝イドル（大部分）

四―二　いわゆる対馬方言の非九州弁的要素について

また、従来においては、「対馬方言に関する非九州方言的要素」が強調されがちであるが、どんなものであろうか。勿論、対馬方言には、前述の如く、肥前方言よりも豊前方言に近い面が或程度認められ、それはそのまま非九州方言的要素と見なされる場合が多い。また、対馬には、浅藻・赤島・水崎など、本州からの集団移住によって開かれた部落があり、そこでは当然、非九州的―というよりもむしろ非対馬的―方言が著しい。

しかし、全体として見た場合、対馬方言はやはり、九州―特に北九州方言との相関性が著しい事、前述の如くである。なお、ここで注意すべきは、下記①～⑩の如く、《いわゆる対馬方言の非九州弁的要素に関し、壱岐をはじめ九州属島諸方言との共通性が或程度認められる》という事。この場合、壱岐との共通性については、或程度前述した所であり、至極当然の事とも言えそうであるが、しかし、下記①～⑩の如き九州西南部属島諸方言との相関性は誠に興味深い。この辺の事情も、対馬方言の性格に関する或面を物語っているのでなかろうか。

① 例えば、対馬各地で、kaɣe・kãge（影）など、語中尾ガ行子音に関する鼻音性がしばしば認められるが、これも直ちに非九州方言的要素と断定する事はできない。九州諸方言においてカ行鼻濁音が稀な事は言うまでもないが、しかし、五島や屋久島・口永良部島・種子島など属島諸方言では、『日本言語地図』第1・2図でも示される様に、ŋ・～gの如き鼻濁音がしばしば認められる。対馬方言のカ行鼻濁音については、近畿以東に存する本州諸方言のそれと関係づけて考えるよりも、やはり、五島など九州属島諸方言の場合と関係づけるべきであろう。尤も、《それら諸島の鼻濁音が、九州方言の古い姿を反影しているかどうか》については、なお今後にまつ所が多い。

② 牝馬の意のゾーヤク（対島大部分）＝九州には比較的少く、むしろ東日本諸方言に多い様であるが、しかし、種子島・鬼界島などではかなり用いられている。

③ 水田の意のタバル（琴・仁田・仁位・小茂田）＝九州には稀であるが、甑島のテーバイ形などは、一おうそれと関係づけて考えられる。

④ 竹馬の意のユクグミ（下県各地）＝九州には少いが、五島のユキゲタなどは一おう考え合わされる。

⑤ 桑実の意のナリ（舟志など）＝九州では稀であるが、薩南諸島における果物の意のナリ形などが考え合わされる。

⑥ 小笊の意のタカゲ（舟志）＝九州では稀な様であるが、五島では飯篭の意のタカゲ形が存する。

⑦ 鍬の意のパ（久和・内院・瀬・豆酘）＝九州には稀であるが、天草や沖縄その他には、パ・パイ・ペーなどの形がある。

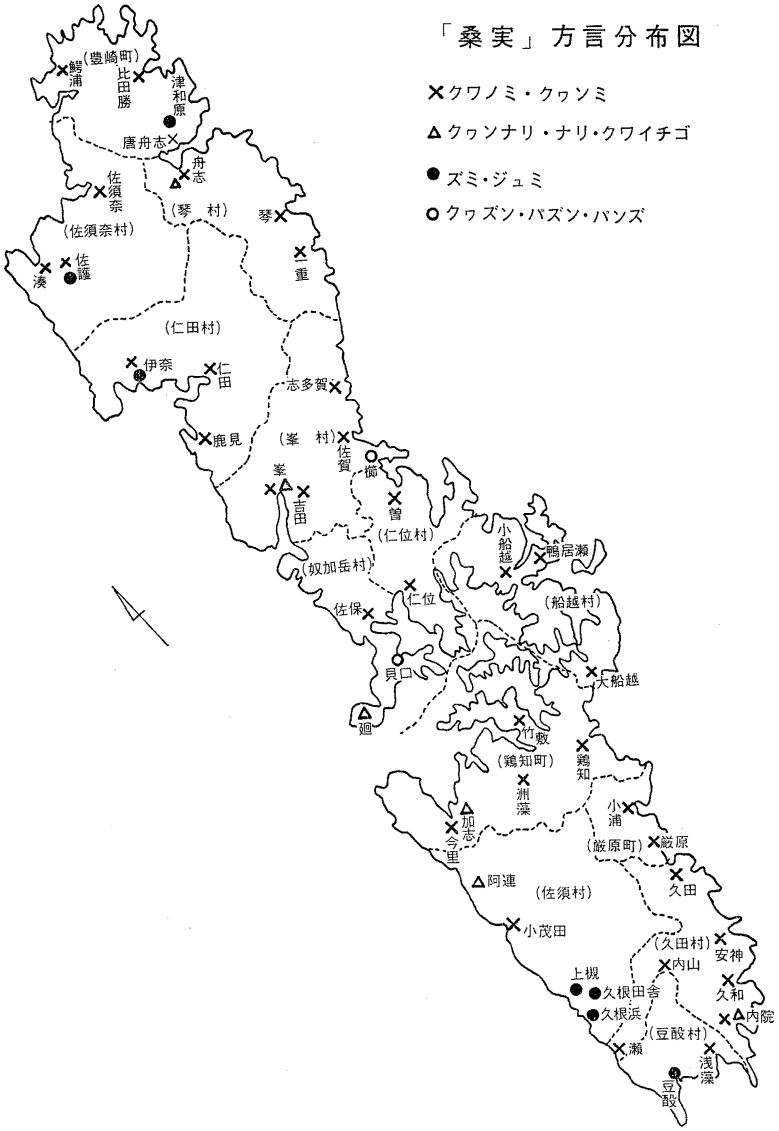
⑧ 案山子の意のカボシ（下県南部）＝九州では稀であるが、五島のトボシ形などと関係があるのかもしれない。

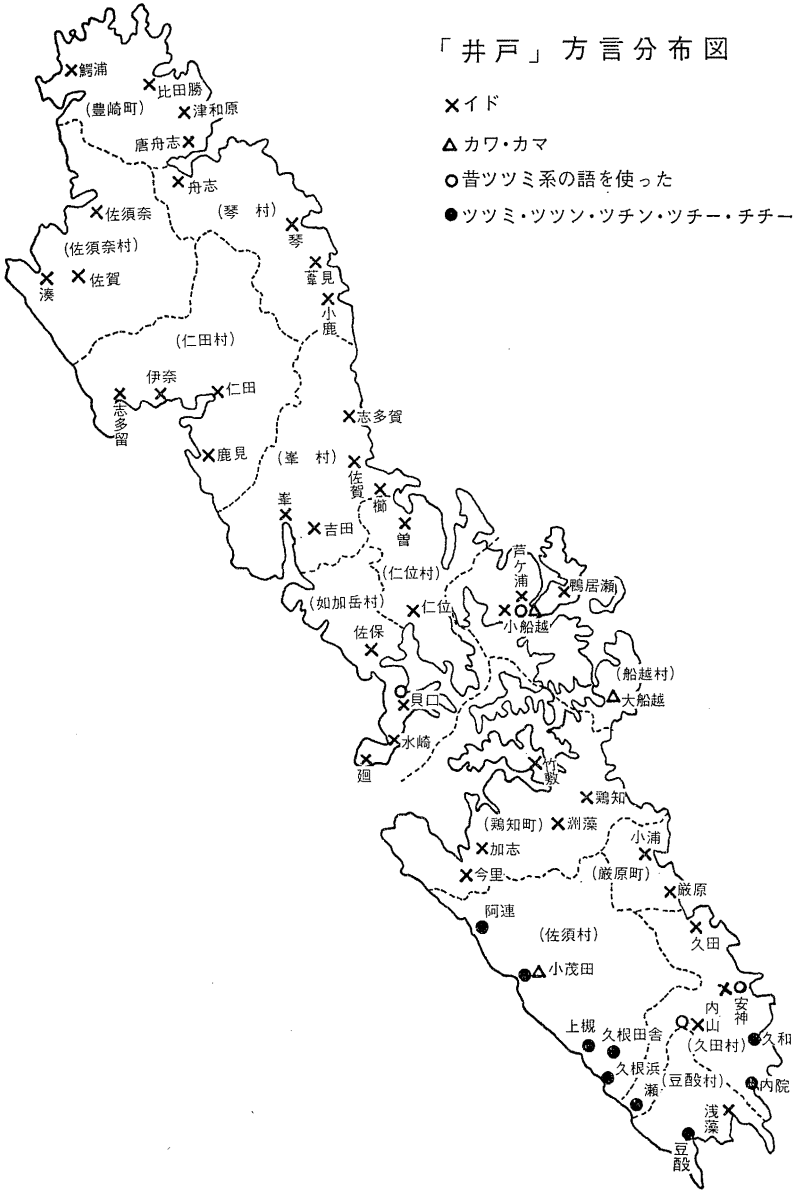
⑨ 隠鬼の意のカゴミ（佐護）・ゴジューカゴミ（舟志・加志）＝九州では少い様であるが、壱岐にカゴミまたはカゴミカゴミ形がある。

⑩ 鬼ごっこの意のオニモーヤ（雞知）・モーヤゴト（厳原）＝九州西南部にも似た形が若干存するが、やはり天草島など属島に著しい様である。

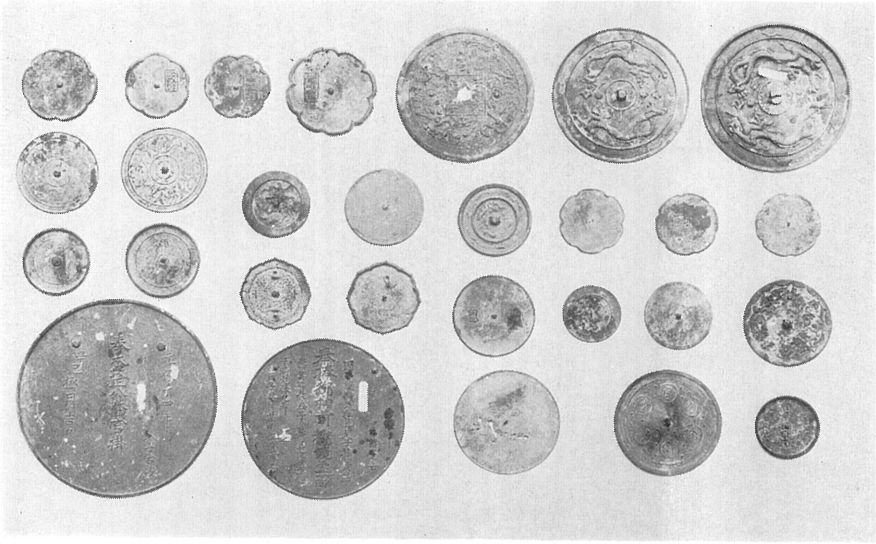
付　対馬方言分布図二つ

以下、参考までに、桑実および井戸に関する対馬方言分布図を掲げておこう。その前者は、島の中央部と周辺部とが言語的に対立する例であり、後者は、豆酘など下県南部の言語的特異性を示す例である。

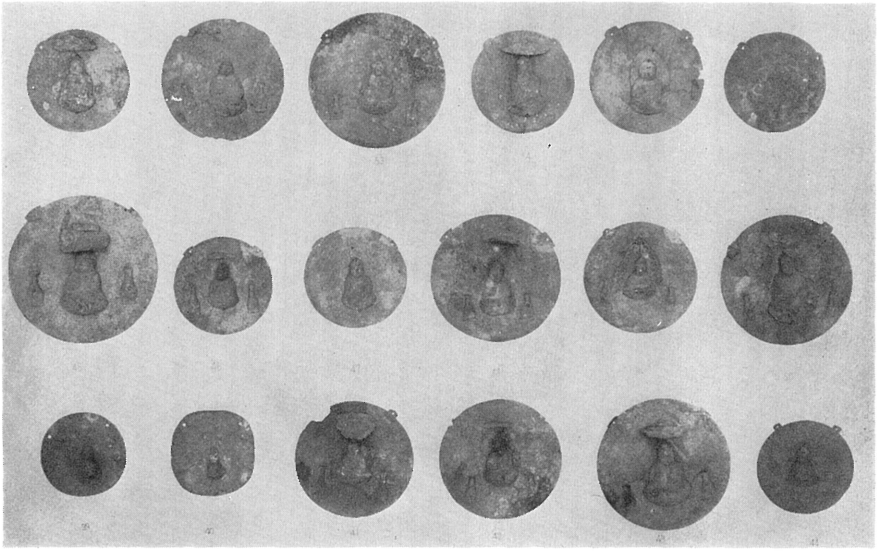

「桑実」方言分布図
×クワノミ・クゥソミ
△クゥンナリ・ナリ・クワイチゴ
●ズミ・ジュミ
○クゥズン・パズン・パンズ
(豊崎町)
鰐浦
比田勝
津和原
唐舟志
舟志
佐須奈
(琴　村)
琴
(佐須奈村)
佐護
湊
重
(仁田村)
伊奈
仁田
志多賀
鹿見
(峯　村)
佐賀
櫛
峯
吉田
曽
(仁位村)
小船越
鴨居瀬
(奴加岳村)
仁位
(船越村)
佐保
貝口
大船越
廻
竹敷
(鶏知町)
鶏知
洲藻
小浦
加志
今里
(厳原町)
厳原
阿連
(佐須村)
久田
小茂田
(久田村)
安神
内山
上槻
久根田舎
久和
久根浜
内院
(豆酘村)
瀬
浅藻
豆酘


「井戸」方言分布図
×イド
△カワ・カマ
○昔ツツミ系の語を使った
●ツツミ・ツツン・ツチン・ツチー・チチー
鰐浦
比田勝
(豊崎町)
津和原
唐舟志
舟志
佐須奈
(佐須奈村)
佐賀
湊
(琴　村)
琴
菫見
小鹿
(仁田村)
伊奈
仁田
志多留
志多賀
鹿見
(峯　村)
佐賀
櫛
峯
吉田
曽
(仁位村)
(如加岳村)
仁位
佐保
貝口
水崎
廻
芦ケ浦
鵜居瀬
小船越
(船越村)
大船越
竹敷
鶏知
(鶏知町)
洲藻
加志
今里
小浦
(厳原町)
厳原
阿連
(佐須村)
久田
小茂田
安神
内山
(久田村)
久和
上槻
久根田舎
久根浜
(豆酘村)
内院
瀬
浅藻
豆酘

峰村 海神神社　如来形立像



峰村 海神神社　神鏡



上対馬町 霹靂神社　懸仏

厳原町 法晴寺　菩薩形立像

豊玉村 観音寺　観音菩薩像

厳原町 大興寺　釈迦如来像

厳原町 豆酘観音堂　銅金鼓

厳原町 古藤家　金銅大合子